

猪野遺跡

第 3 次調査報告書

—集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2010

大分市教育委員会

序 文

本書は、集合住宅建設に伴い平成 21 年度に実施しました猪野遺跡第 3 次調査の発掘調査報告書であります。

猪野遺跡の所在する鶴崎台地は、これまでの調査によって縄文時代から中世に至るまでの永きに亘って人々の生活が営まれていたことがわかっております。今回報告いたします猪野遺跡も例外ではなく、過去の調査におきまして弥生時代後期の集落跡や中世の地鎮祭祀の跡が発見されているところです。調査をおこなった場所が遺跡の縁辺部にあたる今回の調査におきましても竪穴住居跡が見つかり、弥生時代のムラの広がりを知り得る上で貴重な成果となりました。

本報告書が市民の皆さまの埋蔵文化財保護への理解と認識を深める一助となり、さらには郷土の歴史の学習や研究に幅広くご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、ご理解とご協力をいただきました有限会社三宮実産業代表取締役三宮壽様並びに関係各位に対しまして、深く感謝申し上げます。

平成 22 年 3 月 31 日

大分市教育委員会

教育長 足立 一馬

例 言 ・ 凡 例

- 1. 本書は大分市教育委員会が集合住宅建設に伴い三宮壽氏の委託を受け実施した、猪野遺跡第3次調査の発掘調査報告書である。
- 2. 調査は大分市教育委員会が主体となり、掘削・埋戻し業務及び出土遺物洗浄は明大工業株式会社に委託した。又、座標及び水準点の測量についても同社が実施した。
- 3. 調査は永松正大が担当し、遺構図、遺構写真撮影等の記録資料作成は永松が行った。記録作成については、一部明大工業株式会社に協力いただいた。写真については、デジタル及び銀塩カメラを用いて撮影を行い、35mm、ブローニー判（6×9）、メモリーディスクに記録保存を行った。
- 4. 本書に掲載した遺構のデジタルトレース図作成は小野千恵美・松木晴美・廣瀬育子（文化財課嘱託職員）が行った。
- 5. 本書に掲載した遺物の実測図・拓影・デジタルトレース図等作成は小野・松木が、石器については実測図を羽田野裕之（文化財課嘱託職員）、トレース図を鍋島千恵子（同）が作成した。
- 6. 遺物写真撮影は廣瀬、永松が行った。
- 7. 本書の執筆は永松、廣瀬が行った。分担は各項の末尾に記す。
- 8. 本書の編集は永松、廣瀬が行った。
- 9. 出土遺物、記録資料等は、大分市文化財課に収蔵・保管している。
- 10. 本書に用いた方位はすべて座標北（G.N）である。また、基準点の座標は国土調査法第Ⅱ座標系を使用し、日本測地系の数値を記載した。標高は3級水準点より測設した数値を使用した。
- 11. 本書に用いた遺構略号は次の通りである。
SB：掘立柱建物、SH：竪穴住居、SK：土坑、SP：柱穴遺構、SX：性格不明遺構
- 12. 本書を作成する際に参考とした文献は、第1章第3節 遺跡の立地と環境の末尾に記す。

本文目次

挿図目次

第1章 はじめに	第1図 猪野遺跡の位置と周辺の遺跡……………2
第1節 調査に至る経緯……………1	第2図 猪野遺跡これまでの調査地点（1/5000）…4
第2節 調査組織……………1	第3図 遺構配置図（1/200）……………6
第3節 遺跡の立地と環境……………2	第4図 1区平面・土層断面図（1/80）……………7
	第5図 SH040 遺構実測図（1/40）……………8
第2章 調査の成果	第6図 1区検出土坑実測図①（1/30）……………9
第1節 調査の概要……………5	第7図 1区検出土坑実測図②（1/30）……………10
第2節 主要遺構と遺物……………5	第8図 1区出土遺物実測図（1/3・1/1）……………11
（1）1区……………5	第9図 2区平面・土層断面図（1/80）……………12
（2）2区……………12	第10図 SB020 遺構実測図（1/40）……………13
（3）3区……………15	第11図 2区検出土坑実測図（1/30）……………14
第3章 まとめ……………17	第12図 2区出土遺物実測図（1/3）……………15
	第13図 3区平面図（1/80）……………15
	第14図 SH035・SP035a 遺構実測図（1/40）…16
	第15図 3区検出土坑実測図（1/30）……………16
	第16図 3区出土遺物実測図（1/3）……………17

第 1 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

猪野遺跡は、鶴崎台地上に展開する葛木遺跡、米竹遺跡と共に大分市中部を代表する弥生時代の遺跡である。鶴崎台地の頂部は高低差の少ない平坦面をなしており、猪野遺跡の範囲はおよそ南北 2.2km、東西 0.7km におよぶ。また、範囲内には小規模な谷地形が見られる。

近年、猪野・葛木地区の開発が増加し、それと共に開発範囲が主要道路沿いから水田耕作地など農地部分へ移行する傾向が見受けられる。これらの開発事業に関しては、試掘調査の結果を踏まえ、事業者と大分市教育委員会文化財課との協議を行っている。それにより、事業者の方々のご理解とご協力をいただき、盛土工法や RC 工法などによる遺跡保全を図っており、遺跡保全が困難な場合のみ発掘調査を実施している。

このような状況下、有限会社三宮実産業（代表取締役三宮壽）による大分市大字猪野字猪野原 1269 番 1・1274 番 9・1274 番 10 における集合住宅建設及び宅地造成が計画された。当該地区は、猪野遺跡の一角にあたることから、平成 20 年 7 月 10 日に遺跡の状況と調査の対象範囲を確認する為、試掘調査を実施した。試掘結果を踏まえ、設計（代理）者である株式会社大東建託と共に事前協議を行い、調査範囲と埋蔵文化財の発掘調査と記録保存の方針を決定し、平成 21 年 6 月 25 日付け埋蔵文化財発掘調査等協定書、同日付けで平成 21 年度埋蔵文化財の発掘調査委託契約を締結し、本調査（猪野遺跡第 3 次調査）として、平成 21 年 7 月 21 日～8 月 21 日にかけて実施した。平成 21 年 8 月 24 日から同協定書並びに発掘調査実施計画書に基づき、資料整理及び報告書刊行作業を実施し、平成 22 年 3 月 26 日まで行った。（永松）

第 2 節 調査組織

平成 21 年度

調査主体 大分市教育委員会 教育長 足立一馬

事務局 大分市教育委員会教育部文化財課

次 長 兼 課 長 玉永光洋

参 事 岩田祐治

課 長 補 佐 塔鼻光司

主 幹 後藤典幸

管理係 課長補佐兼係長 福田誠一

主 査 幸俊昭（～平成 21 年 6 月） 筒井和信 渡辺政雄（平成 21 年 7 月～） 桑原治
栗田博之 神崎小由美（平成 21 年 7 月～）

指 導 主 事 植木和美

主 任 加藤キヌ（～平成 21 年 6 月） 竹中智美 宮崎勲 山上洋二郎 麻生重徳

文化財係 係 長 坪根伸也

専 門 員 池邇千太郎 高畠豊 河野史郎 塩地潤一

主 任 永松正大 佐藤道文

主 事 五十川雄也 長直信 石川ゆかり

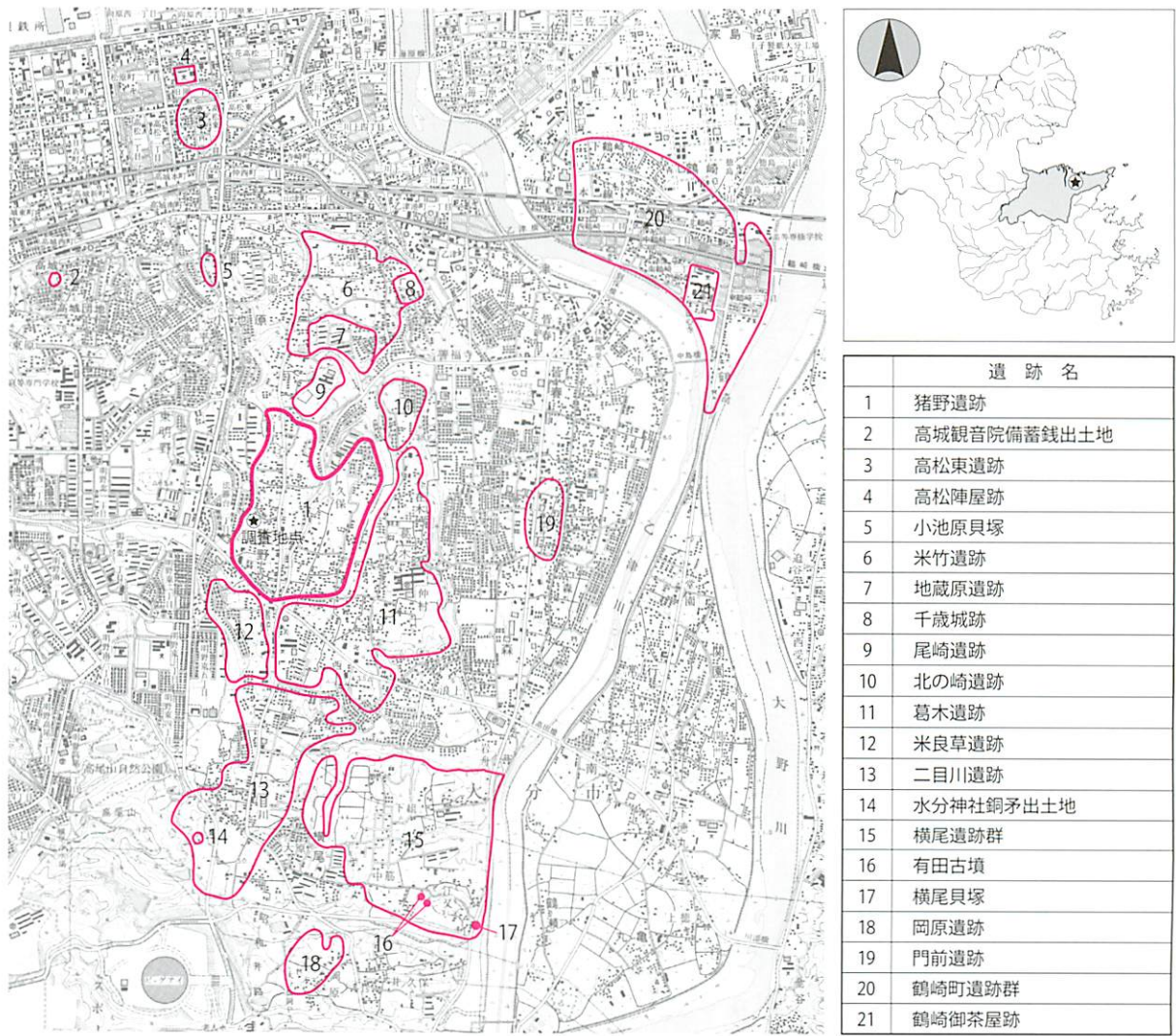
嘱 託 職 員 井口あけみ 上原翔平 奥村義貴 小野千恵美 木村藍子 倉増美智代 小島愛
佐藤孝則 佐藤良子 仲町憲治 鍋島千恵子 羽田野裕之 稗田智美 姫野久恵
廣瀬育子 松本晴美 三嶋桂司 山下朋紀

第3節 遺跡の立地と環境

猪野遺跡は、大分平野最大の河川である大野川の支流乙津川左岸より約4km上がった鶴崎台地上に位置している。標高40m前後の鶴崎台地は、西は大分川、東は乙津川・大野川に挟まれており、南北に延びる。同台地の周辺には様々な時代の遺跡が広範囲に分布しており、古来より暮らしに適した環境であったと考えられる。

現時点で、旧石器時代に比定される明確な状態での遺構の検出はされていない。しかし、遺物の出土は顕著であり、今後の調査例の増加に伴い、鶴崎台地上における当該期の遺跡の展開が想定されている。当該期の遺物が出土した遺跡としては、台地北側の地藏原遺跡、尾崎遺跡、台地南側の横尾遺跡群などが挙げられる。地藏原遺跡では、二次堆積土中から石核や削器、二次加工された剥片石器が出土している。尾崎遺跡、横尾遺跡群の多武尾遺跡からは、弥生時代の遺構埋土中からサヌカイト製の有茎尖頭器、ナイフ形石器が、基盤上面から流紋岩製の剥片などが出土している。

縄文時代の遺跡は、鶴崎台地上において明瞭でない。おそらく、後世の土地開発などに伴う削平により消滅したためと考えられる。しかしながら、数少ない当該期の遺跡は大分平野の縄文時代を考える上で重要な位置を占めており、小池原式土器の標識遺跡として後期前半を代表する小池原貝塚（現在消滅）や、近年の調査において目覚ましい成果を挙げた横尾貝塚がある。横尾貝塚では、早期から後期にかけての土器を中心とした多量の遺物が出土している。その中でも、早期後半の重さ10kgを超える黒曜石や、早期末のカゴに入った状態での黒曜石



第1図 猪野遺跡の位置と周辺の遺跡

の発見は、当時の交易ルート解明に向けての新たな指針を示すものである。

弥生時代については、前期は遺跡数が少ないが、後期になると爆発的な展開をみせる。猪野遺跡周辺においても遺跡数の増加傾向はみられ、尾崎遺跡、地藏原遺跡、米竹遺跡、北の崎遺跡、横尾遺跡などで環濠を含む集落跡が確認されている。地藏原遺跡では、住居内から銅鏡1点が出土している。また、横尾遺跡群の多武尾遺跡において検出された後期の環濠集落では、環濠の内側に土塁状の遺構が造られた可能性が指摘でき、溝内からは多量の土器と朝鮮式小銅鐸が出土している。

古墳時代になると、鶴崎台地上で確認できる生活遺構が激減する。地藏原遺跡において、中・後期の竪穴住居が検出されており、一定程度の集落の展開は認められるものの、同台地全体としてみると、この時期に集落が低地域へ移動したことが想定される。墳墓では、猪野遺跡近隣地区で唯一の高塚墳である有田古墳群の2基が挙げられる。共に中期に比定される円墳で、周囲には葦石を施している。また、当該期の台地周辺の崖には一の谷横穴墓群など多くの横穴墓が構築されている。

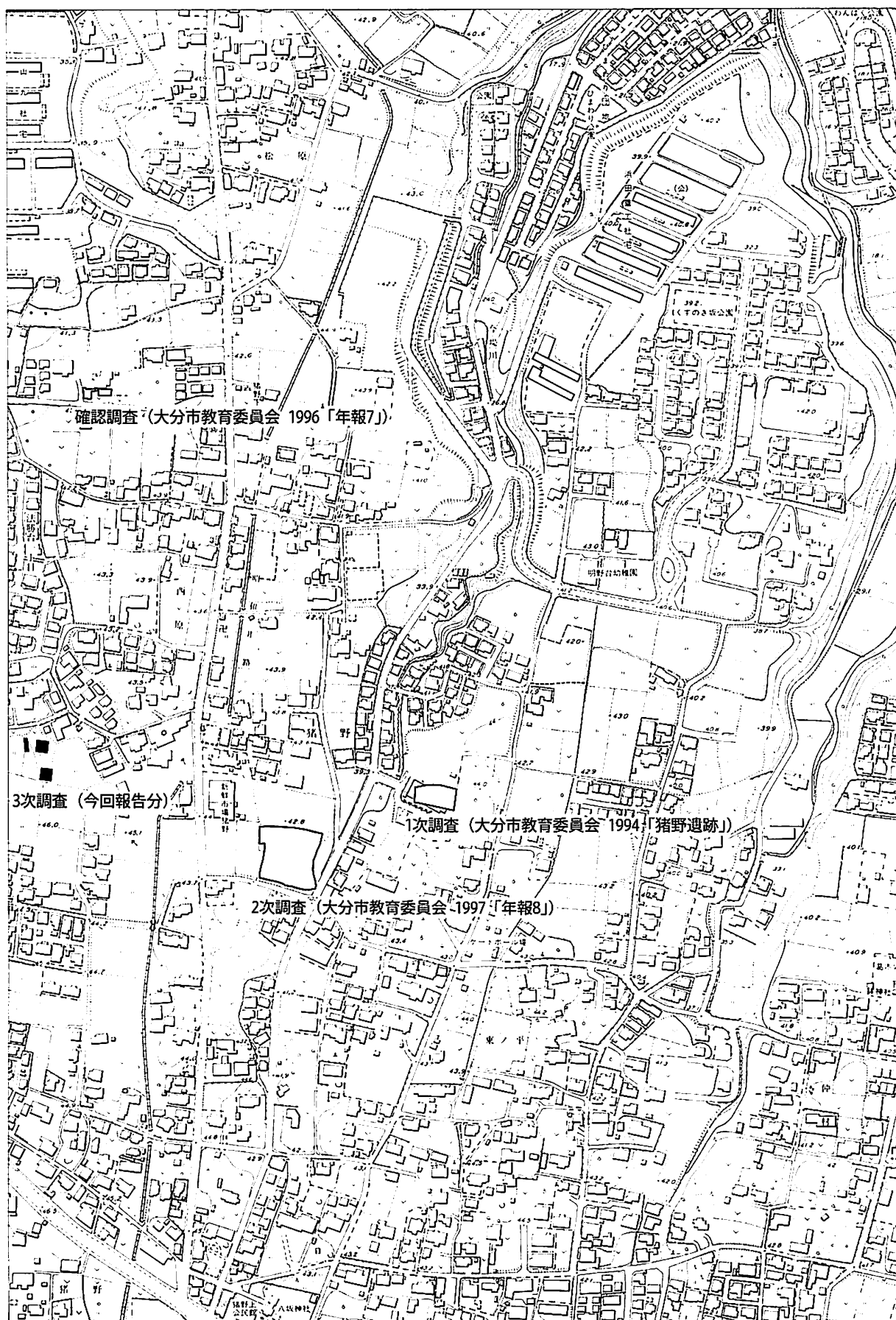
古代の鶴崎台地には、地藏原遺跡や猪野新土井遺跡など官衙的要素をもった遺跡の展開がみられる。特に地藏原遺跡では、奈良時代後期から平安時代初頭に比定される掘立柱建物が80棟以上検出されている。それらの建物は、4段階の変遷を辿りながら存続した可能性が指摘されており、さらに、建物群の中心的な施設と思われるコの字形の溝で囲まれた一群と、倉庫と思われる一群に分けることができる。また、多量に出土した遺物のなかには地域性の強い軒丸瓦や軒平瓦、円面硯などがみられる。一方で、台地南側には生産遺構の集中が認められる。工人集落に比定されている二目川遺跡、集落と土師器焼成坑などが検出された井ノ久保遺跡、須恵器の窯跡が見つかった松岡古窯跡、粘土採掘坑群が確認された横尾遺跡が挙げられる。横尾遺跡の粘土採掘坑群は9～10世紀代を中心としており、周辺での継続的な土器生産を窺わせる。

中世の鶴崎台地一帯は、高田荘に比定される地域である。南北朝期以降は大友氏の所領となり、戦国期になると大友氏の被官となった在地領主の給地とされたようである。このことは、台地上の猪野中原遺跡、猪野新土井遺跡、横尾遺跡などで確認されている戦国期の方形館が、大友氏の家臣によって造られた可能性を示唆するものである。また、台地の西北側縁辺部に築造された千歳城は、部分的に残る土塁や堀の痕跡から、方形の城地と推定されている。

(廣瀬)

【参考文献】

- 大分市教育委員会 1982 『多武尾遺跡調査概報』
- 大分市教育委員会 1994 『大分市埋蔵文化財調査年報5』
- 大分市教育委員会 1994 『猪野遺跡－マンション建設に伴う発掘調査報告書－』
- 大分市教育委員会 1996 『大分市埋蔵文化財調査年報7』
- 大分市教育委員会 1997 『大分市埋蔵文化財調査年報8』
- 大分市教育委員会 2008 『横尾遺跡－大分市横尾土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書－』
- 大分市教育委員会 2009 『米竹遺跡－第3次調査－集合住宅建設に伴う発掘調査報告書－』
- 大分市教育委員会 2009 『横尾遺跡2－大分市横尾土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書－』
- 大分市史編纂委員会 1987 『大分市史』上巻、中巻 大分市
- 塩地潤一 2006 「豊後国における8・9世紀の遺跡動向～乙津川流域を中心として～」【第7回西海道研資料再掲載】『第8回西海道古代官衙研究会資料集』 西海道古代官衙研究会



第2図 猪野遺跡これまでの調査地点 (1/5000)

第2章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

今回の調査では、試掘調査の結果に基づき、調査区を3つに分けて設定した。試掘調査の状況から調査地の南東方向に向かい、遺跡の密度が高いとの所見があり、遺跡の中心部への遺構の集中が想定されていた。また、調査地は、いわゆる鶴崎台地の西端にあたり、約10mほど西側では北に開析する谷地形が形成されており、南北約1kmに延びる斜面地となる。周辺は、水田耕作地と住宅地が密集しており、調査地は現在畑地で、かつては桑畑として利用されていた。また、調査地の地表は現況道路面より約2m高く、盛土造成がなされていると考えられる。

調査は、伐採及び伐根を行い、重機による表土掘削後、人力による遺構検出、遺構掘削を行った。調査記録では、国土座標に基づく4mメッシュを設定し、遣り方測量による記録を行った。(永松)

第2節 主要遺構と遺物

(1) 1区(第3・4図)

1区は南東に設定した調査区である。約11×11mの調査区で、表土より約0.9～1.2m下で遺構を検出した。南西隅の土層(第4図b-b')から、水田耕作による鉄分の固着が見られ、また水田造成に伴う客土である黒褐色土がほぼ全面で確認できた。黒褐色土からは、弥生土器や土師器、銅銭が出土しており、中世までの遺物を包含している。調査の結果、弥生時代の竪穴住居、土坑、溝状遺構、多数のピットを検出した。総じて遺構深度は浅く、何らかの削平を受けていると思われ、近世からの造成によると想起される。(永松)

竪穴住居

SH040(第5図)

SH040は1区北東隅で検出した円形竪穴住居。平面で遺構プランの約1/2が確認でき、推定6.0～7.0m規模を測ると想定される。埋土は黒褐色土で、堆積は約0.1mと浅く、削平を受けていると考えられる。埋土中からは出土遺物が少なく、また、須恵器片が混入するなど上層からの混入が見られる。埋土除去後、床面に焼土及び炭化物の集中する不定形土坑(SP040c)、主柱穴を2基検出した。貼床は検出している。不定形土坑は約1.0×0.3～0.4mの土坑で、焼土と炭化物がブロック状に混入している。また、本土坑付近には、炭化物や焼土塊が少量ながら分布していた。壁溝や炉跡、灰溜り土坑は確認できていない。主柱穴は住居壁から約1.2mほど内側で検出しており、4本柱の主柱穴で構成されていたと推定される。主柱穴のSP040aは径約0.3mで深度は約0.8m、同じくSP040bは径約0.4mで深度約0.8mを測る。SP040bから弥生土器片が出土しており、また埋土中にも一定量の弥生土器片が出土していることから、当該期の住居と想定される。(永松)

土坑

SK045(第6図)

遺構は調査区南東で検出した。切り合い関係はない。平面形は南北長約1.1m、東西長約1.0mの円形状を呈し、深さは約0.5mを測る。埋土は土層図に記した。埋土中からは弥生土器片や縄文土器片が出土した。

SK050(第6図)

遺構は調査区東で検出した。ピットを切る。平面形は南北長約1.2m、東西長約0.9mの不正円形を呈し、深さは約0.6mを測る。埋土は土層図に記した。埋土中からは弥生土器片や旧石器時代の石核が出土した。

SK055(第6図)

遺構は調査区中央で検出した。切り合い関係はない。平面形は南北長約0.7m、東西長約0.8mの長方形状を呈し、深さは約0.5mを測る。埋土は土層図に記した。埋土中からは下城式などの弥生土器片が出土した。

Y=25224.000

Y=25220.000

Y=25216.000

Y=25212.000

Y=25208.000

Y=25204.000

Y=25200.000

Y=25196.000

Y=25192.000

Y=25188.000

X=61800.000

X=61804.000

X=61808.000

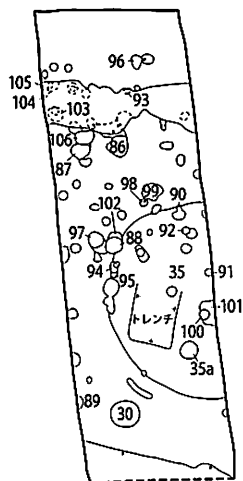
X=61812.000

X=61816.000

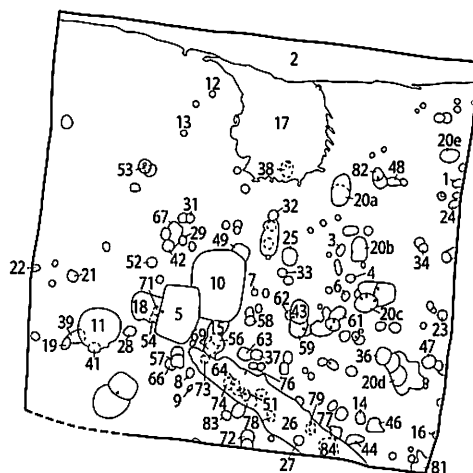
X=61820.000

X=61824.000

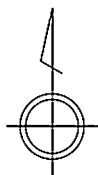
X=61828.000



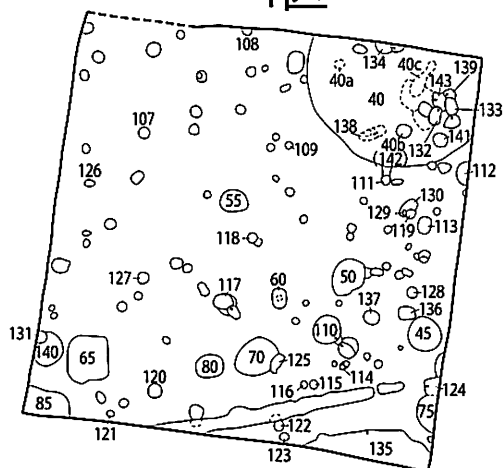
3区



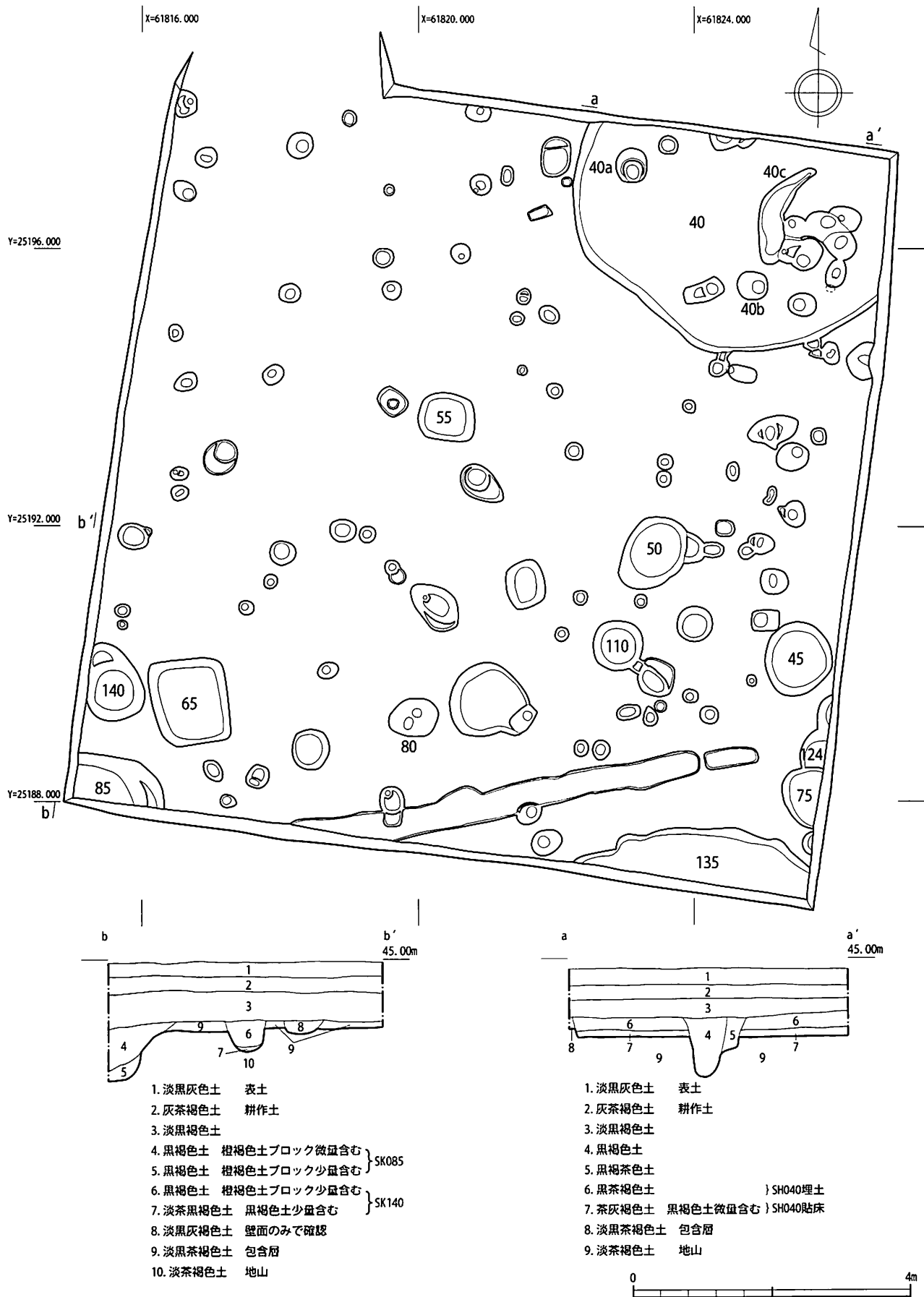
2区



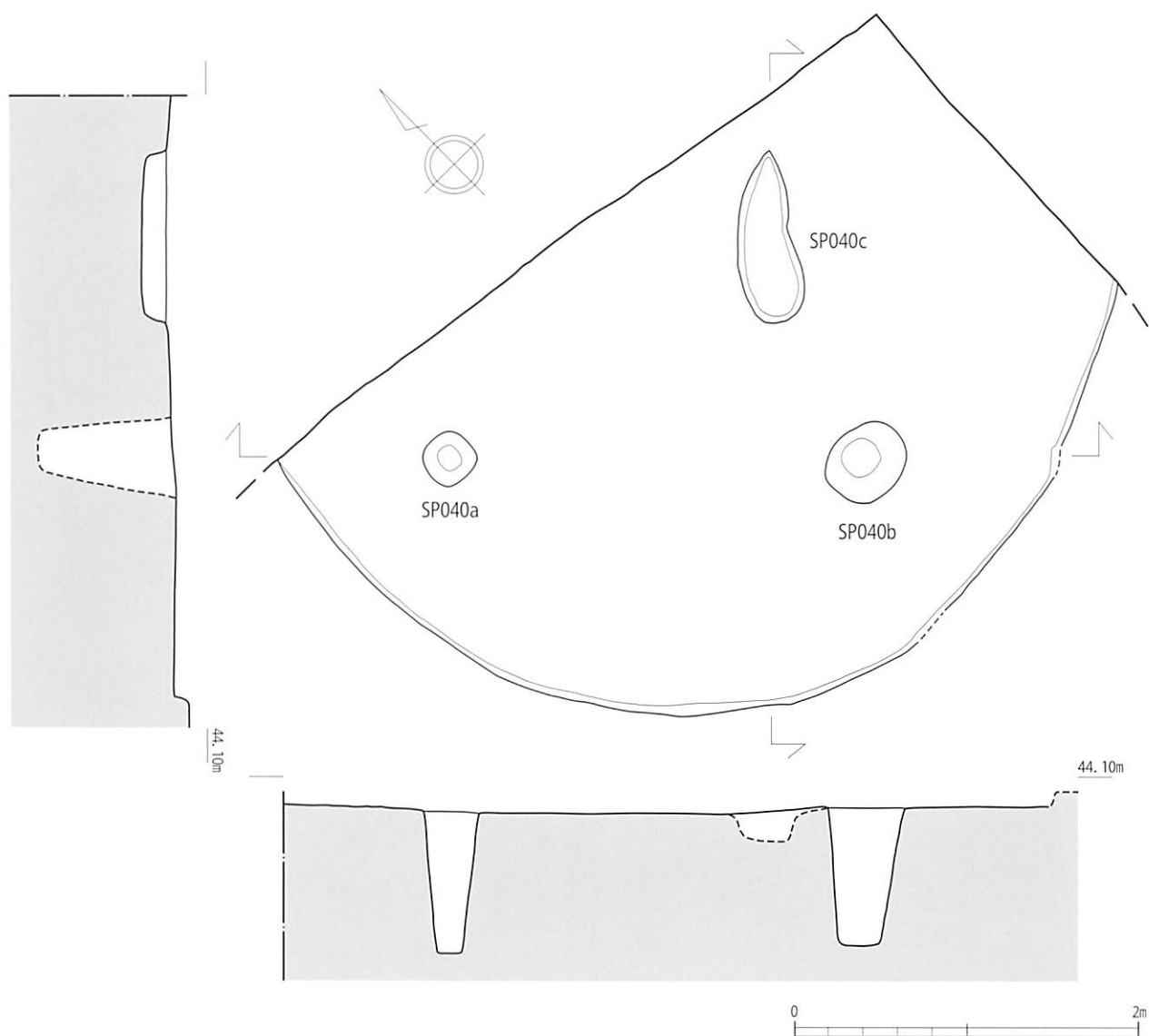
1区



第3図 遺構配置図 (1/200)



第4図 1区平面・土層断面図 (1/80)



第5図 SH040 遺構実測図 (1/40)

SK065 (第6図)

遺構は調査区南西で検出した。切り合い関係はない。平面形は南北長約 1.2m、東西長約 1.1m の長方形状を呈し、深さは約 0.3m を測る。埋土は淡茶褐色土で、黒褐色土を含む。埋土中からは弥生土器片や加工の痕跡が観察できる姫島産黒曜石が出土した。

SK075 (第6図)

遺構は調査区南東の東壁際で検出した。S124 に切られる。検出部分は南北長約 0.9m、東西長約 0.6m を測るが、東側が調査区外にあるため、全体形は不明である。深さは約 0.6m を測る。埋土は黒茶褐色土である。埋土中からは弥生土器片が出土したが、小破片のため図示していない。

SK080 (第7図)

遺構は調査区南で検出した。切り合い関係はない。平面形は南北長約 0.6m、東西長約 0.6m の不正円形を呈し、深さは約 0.5m を測る。埋土は淡黒茶褐色土で、粘質土が混じる。埋土中からは弥生土器片や土師器片が出土した。

SK085 (第7図)

遺構は調査区南西の南・西壁際で検出した。切り合い関係はない。検出部分は南北長約 0.7m、東西長約 1.3m を測るが、南・西側が調査区外にあるため、全体形は不明である。東側にはテラス状の平坦面がある。深さは約 0.7m を測る。埋土は第4図の土層図 b-b' に図示した。埋土中からは弥生土器片や土師器片が出土した。

SK110 (第7図)

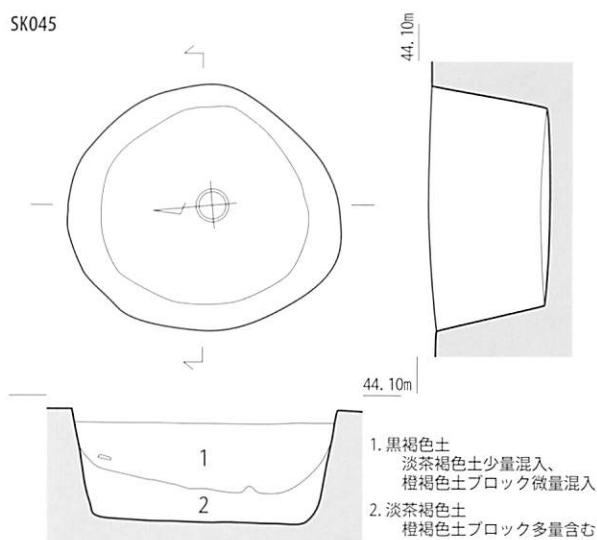
遺構は調査区南東で検出した。ピットを切る。平面形は径約 0.7m の円形状を呈し、深さは約 0.5m を測る。埋土は淡黒茶褐色土で、包含層に近似する。埋土中からは弥生土器片が出土した。

SK140 (第7図)

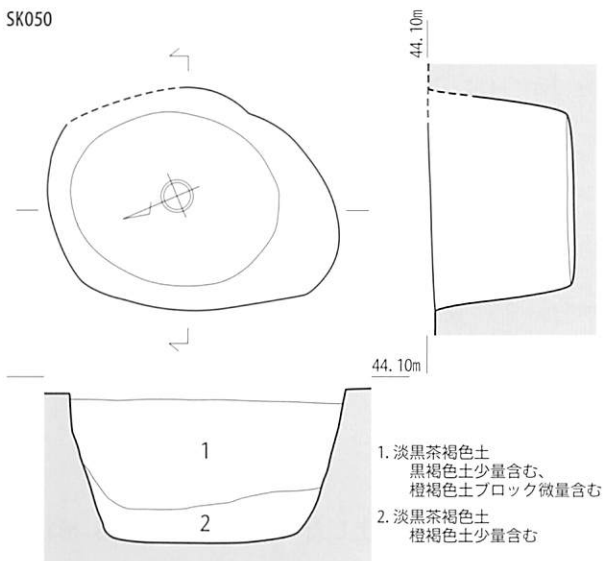
遺構は調査区南西の西壁際で検出した。S131 に切られる。検出部分は南北長約 0.9m、東西長約 0.8m を測り、平面形は不正円形を呈する。深さは約 0.5m を測る。埋土は第 4 図の土層図 b - b' に図示した。埋土中からは下城式などの弥生土器片が出土した。

(廣瀬)

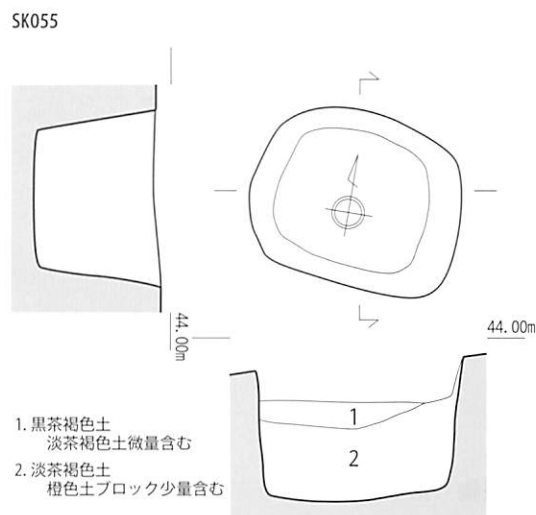
SK045



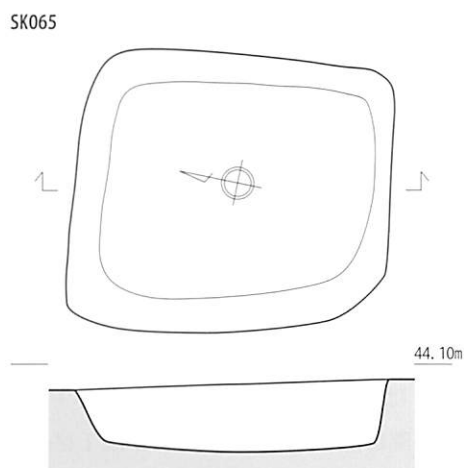
SK050



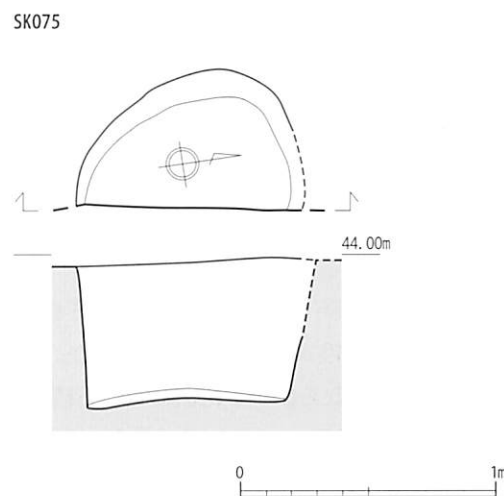
SK055



SK065

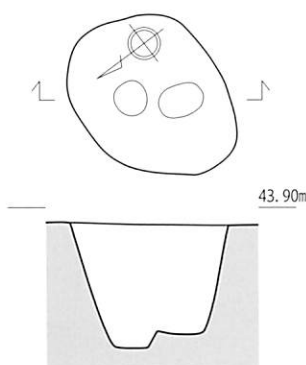


SK075

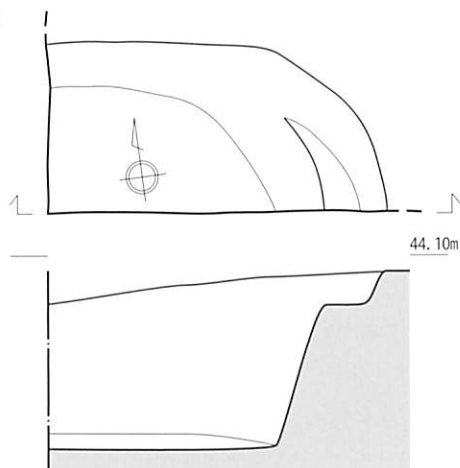


第 6 図 1 区検出土坑実測図① (1/30)

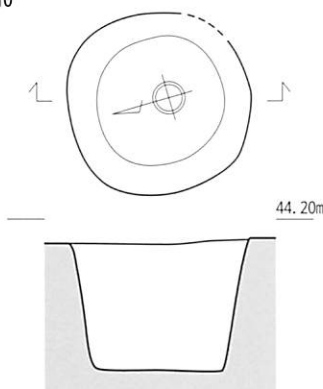
SK080



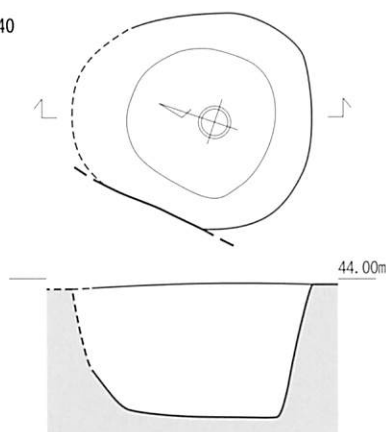
SK085



SK110



SK140

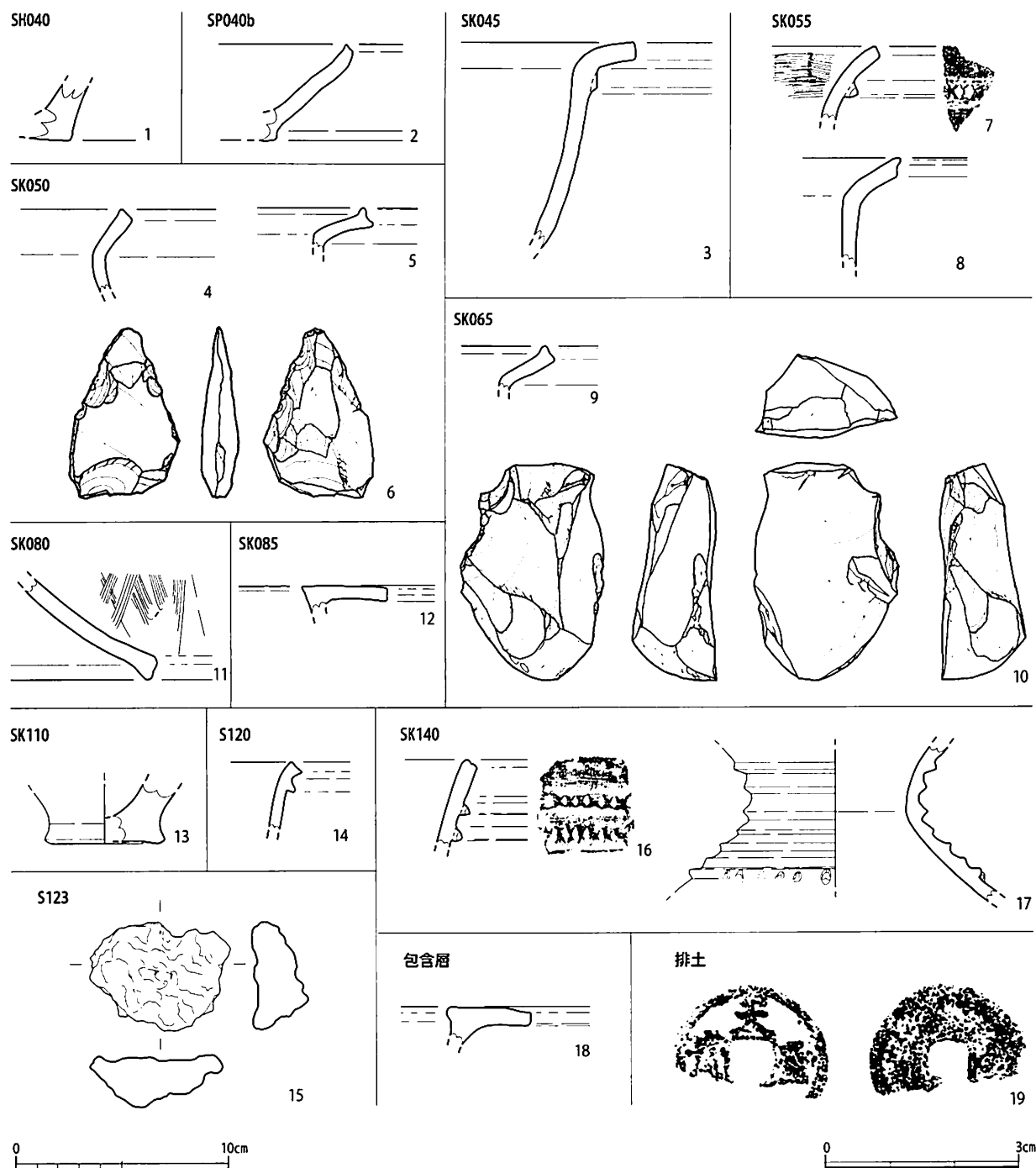


第7図 1区検出土坑実測図② (1/30)

出土遺物 (第8図)

1は1区SH040から出土した弥生土器甕の底部。2は1区SP040bから出土したミニチュア土器で、形状から鉢を意識したものと考えられる。外面は工具によるミガキが施され、口唇部は平坦に成型している。弥生時代中期～後期と考えられる。3は1区SK045の1層から出土した。弥生土器甕で口縁部～胴部まで残存し、外反する口縁下部に三角突帯が見られる。弥生時代中期末頃。4・5は1区SK050から出土した。2点とも弥生土器甕の口縁部。口縁を外反させ、口唇を平坦に成型する。やや口唇端部をはね上げ気味に調整している。いわゆる東北部九州系甕と想定される。6は1区SK050の2層から出土した石器で、姫島産黒曜石に打面が見られる。二等辺三角形形状に加工されており、連続する打ち欠きが確認できることから、刃部を形成する大型石鏃や尖頭器等が想定される。縄文時代晩期～弥生時代前期の所産と考えられる。7・8は1区SK055から出土した弥生土器甕の口縁部。7は緩やかに外反する口唇下部に刻目突帯が貼付られており、いわゆる下城式の甕片と考えられる。内面は横方向のハケ目調整が施される。8は口縁端部がはね上げ気味に突出しており、東北部九州系甕と考えられる。弥生時代中期末頃の所産か。9は1区SK065から出土した東北部九州系甕の口縁部片。10は同じく1区SK065から出土した流紋岩の石核で、打面が確認できる。11は1区SK080から出土した弥生土器蓋片。外面をハケ目調整後ナデを行い、内面は丁寧なナデが施される。端部に黒斑が見られる。12は1区SK085から出土した弥生土器高杯の口縁部片。内外面に丹塗りが施され、口縁端部が鋤先状に延びる。13は1区SK110から出土した弥生土器甕の底部片。14は1区S120から出土したミニチュア土器で、形状から甕と思われる。

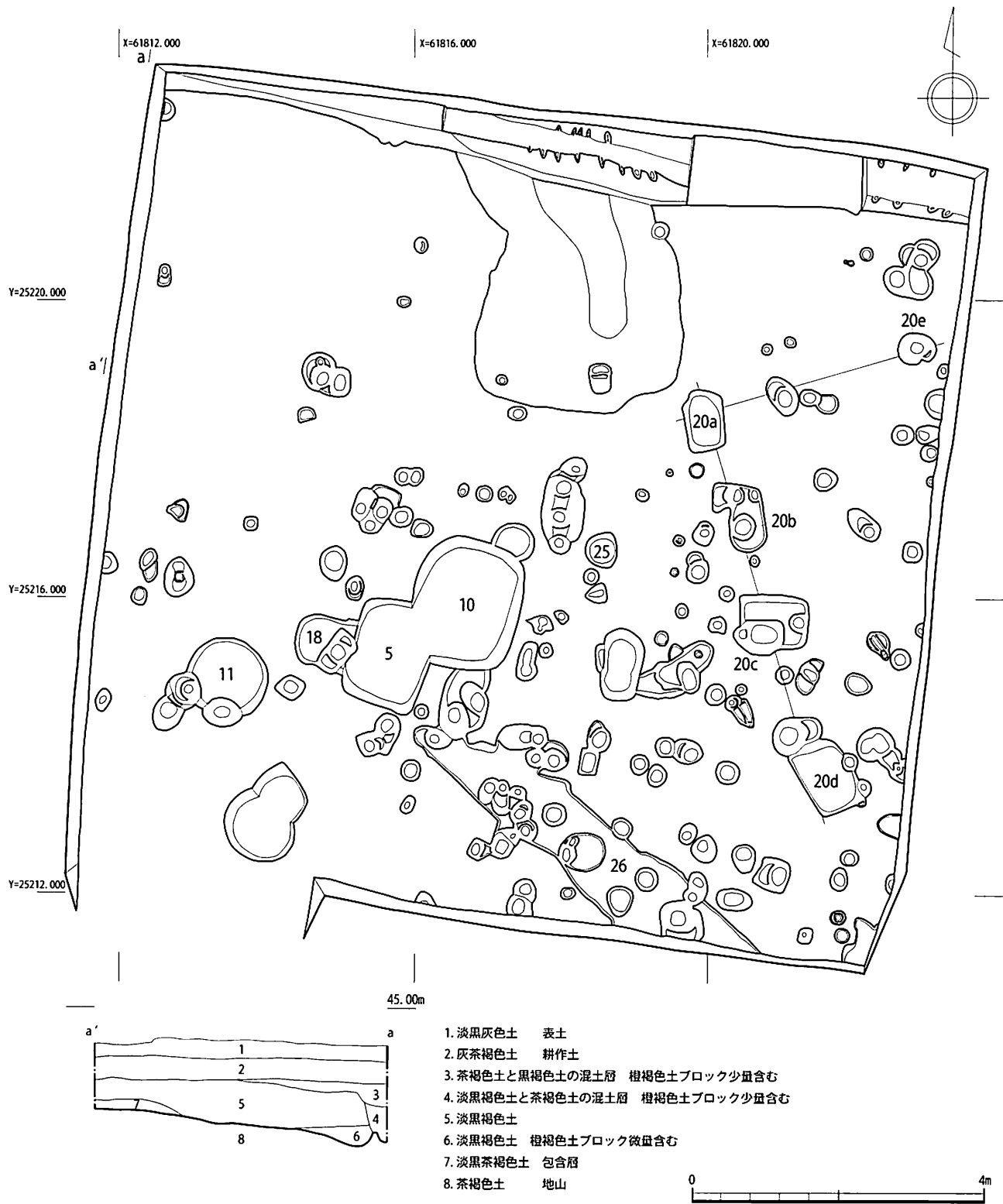
外面に三角突帯を貼付、口縁端部を突帯状につまみ出している。内外面に丹塗りしており、内面では僅かにミガキ風ナデが見られる。下城式に近似する。15は1区S123から出土した鉄滓。碗形滓の一部と思われる。16・17は1区SK140から出土した。16は弥生土器甕の口縁部で、下城式と考えられる。口縁下部に2条の刻目突帯が巡る。口唇部に沈線状の窪みが見られる。弥生時代中期末頃の資料と想定される。17は弥生土器壺の頸部～肩部にあたり、三角状突帯と勾玉状浮文が見られる。弥生時代後期前葉頃の資料と考えられる。18は1区包含層（黒褐色土）から出土した。弥生土器高坏の口縁部片。下半が欠損している。19は排土から発見された銅銭で、「天口通寶」と記されている。おそらく北宋銭の「天聖通寶」（初鑄造年1023年）であろう。（永松）



第8図 1区出土遺物実測図 (1～18 = 1/3・19 = 1/1)

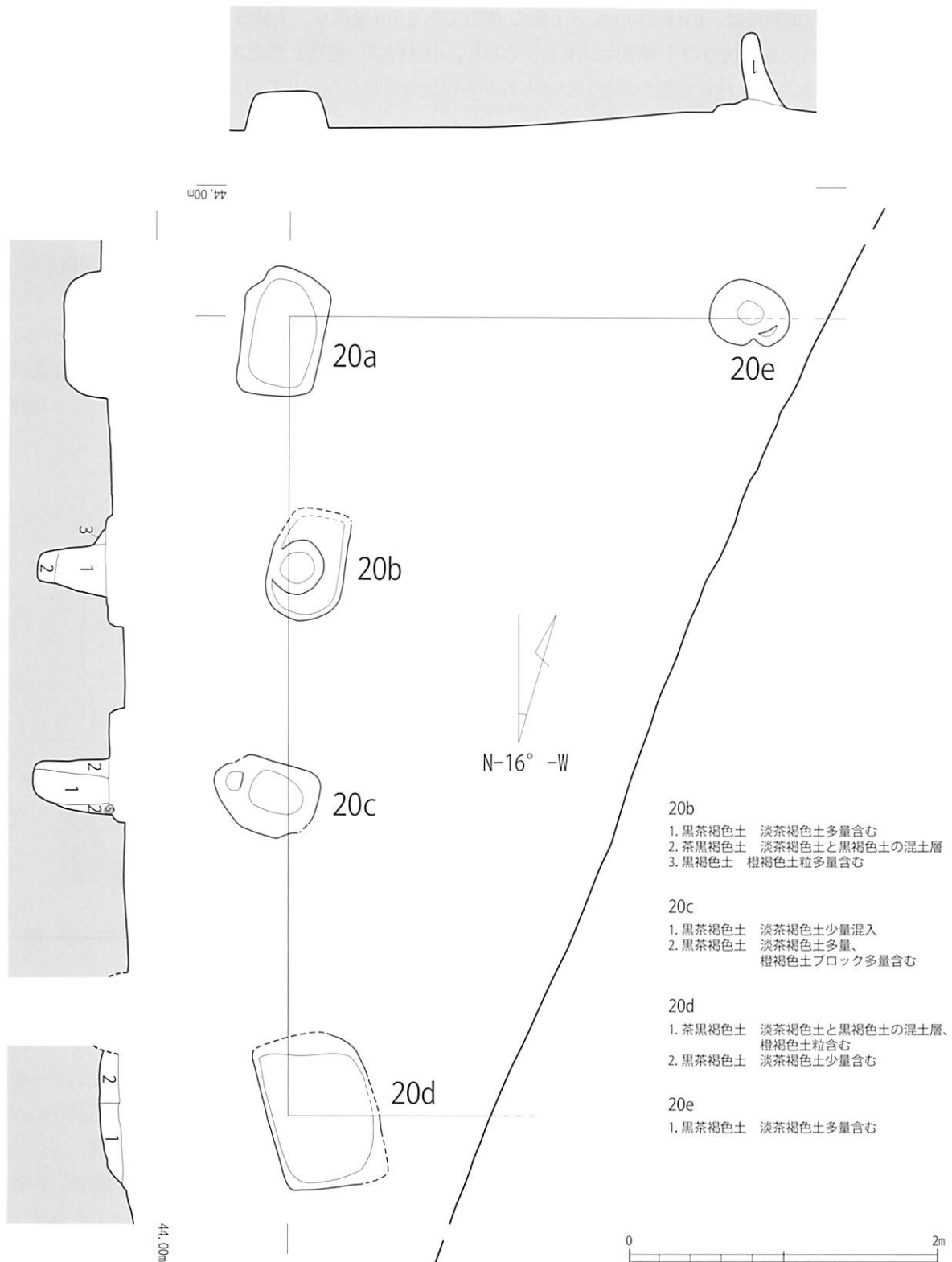
(2) 2区 (第3・9図)

2区は北東に設定した調査区である。約11×11mの調査区で、表土より約0.9～1.8m下で遺構を検出しており、北西に向かい緩やかに傾斜している。北西隅の土層(第9図a-a')から、水田耕作による鉄分の固着と、北側で掘り込みと埋め戻しが見られることから、北側の畔造成の痕跡と考えられる。1区と同様に黒褐色土がほ



第9図 2区平面・土層断面図(1/80)

ば全面で確認できた。黒褐色土からは、弥生土器や土師器が出土している。調査の結果、中世の掘立柱建物、土坑、溝状遺構、多数のピットを検出した。土坑は遺構深度がやや浅く、ピットは深い。また遺構の切り合いが著しいことから、中世と弥生または古代の段階の遺跡の展開が想定される。
(永松)



第 10 図 SBO20 遺構実測図 (1/40)

掘立柱建物

SB020 (第 10 図)

SB020 は 2 区東側で検出した掘立柱建物。現状梁行 1 間 + α 、桁行 3 間で、調査区外東側に延びる。柱穴は掘り返しと思われるプランが見られ、径約 0.4 ~ 0.7m、深度は約 0.3 ~ 0.6m とばらつきが見られ、建物隅の柱穴は概して浅い。その為、SB020e より東へ柱穴がのびる可能性が高い。また、土層観察から柱痕は径約 0.2 ~ 0.3m を測る。柱間距離は、桁行で約 1.4 ~ 1.8m、梁行で約 2.5m を測り、主軸方位は北に対して西に約 16° 振る。SB020d から回転糸切りの土師器片が出土しており、中世段階の建物と想定される。調査地で確認できた建物は 1 棟のみであるが、柱穴の集中が著しいこと等から複数の建物が存在していたものと想定される。

(永松)

土坑

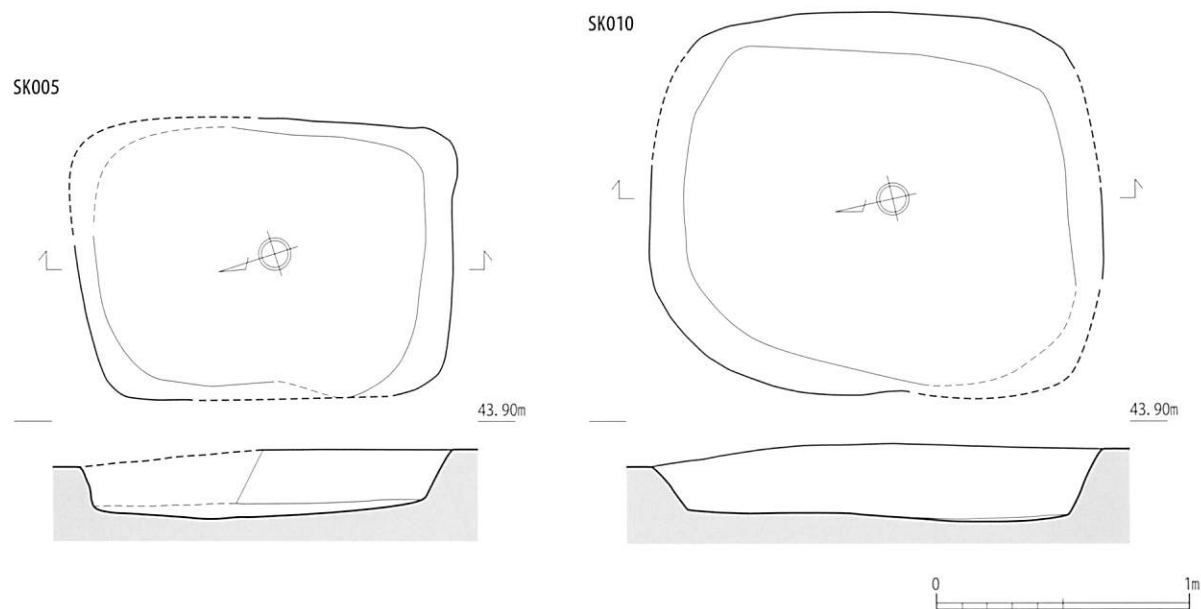
SK005 (第 11 図)

遺構は調査区南西で検出した。SK010、S018、S071 を切る。平面形は南北長約 1.5m、東西長約 1.1m の長方形状を呈し、深さは約 0.3m を測る。埋土は黒茶褐色土で、橙褐色土を含む。埋土中からは土師器片が出土した。

SK010 (第 11 図)

遺構は調査区中央で検出した。SK005 に切られ、S015、S049 を切る。南西隅が SK005 による破壊を受けるが、平面形は南北長約 1.8m、東西長約 1.5m の長方形状を呈するであろう。深さは約 0.3m を測る。埋土は淡茶褐色土で、橙褐色土を含む。埋土中からは弥生土器片や須恵器片が出土した。

(廣瀬)

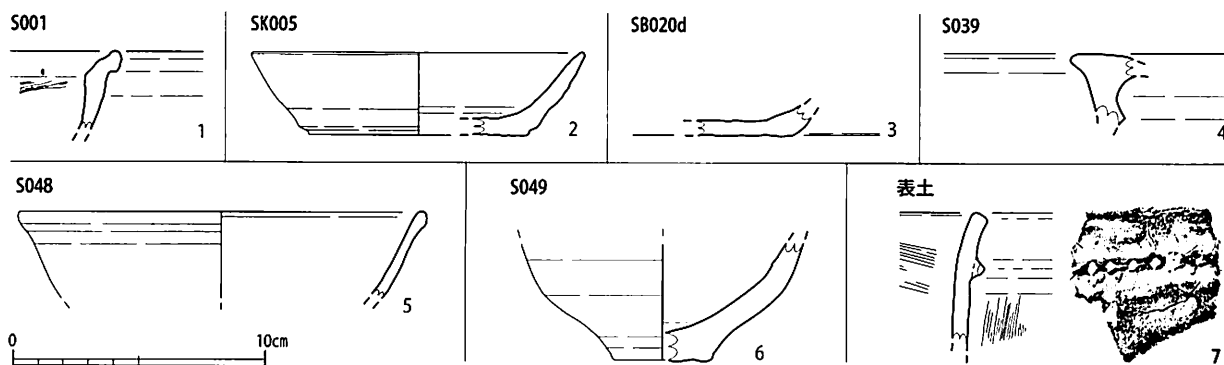


第 11 図 2 区検出土坑実測図 (1/30)

出土遺物 (第 12 図)

1 は 2 区 S001 から出土した土師質土器釜の口縁部片。口縁を屈曲させ口唇端部が僅かに肥厚する。14 世紀代。2 は 2 区 SK005 から出土した土師器環で、底部外面に回転糸切り痕と板状圧痕が見られる。14 世紀前半～中頃の所産と考えられる。3 は 2 区 SB020d から出土した土師器環の底部片で、外面に回転糸切り痕と板状圧痕が見られる。中世段階の遺物と想定される。4 は 2 区 S039 から出土した外面を丹塗りした弥生土器の甕。平口縁と口縁下部の三角突帯が特徴で、須久系の甕と考えられる。5 は 2 区 S048 から出土した青磁碗の口縁部。内外面共に無文で、わずかに口唇端部が肥厚している。13 世紀末以降の所産。6 は 2 区 S049 から出土した弥生土器壺の底部。外面にはハケ目調整とミガキ風ナデが施されている。7 は 2 区付近の表土から出土した弥生土器甕。下城式で、口縁下部に刻目突帯が巡る。

(永松)



第12図 2区出土遺物実測図(1/3)

(3) 3区(第3・13図)

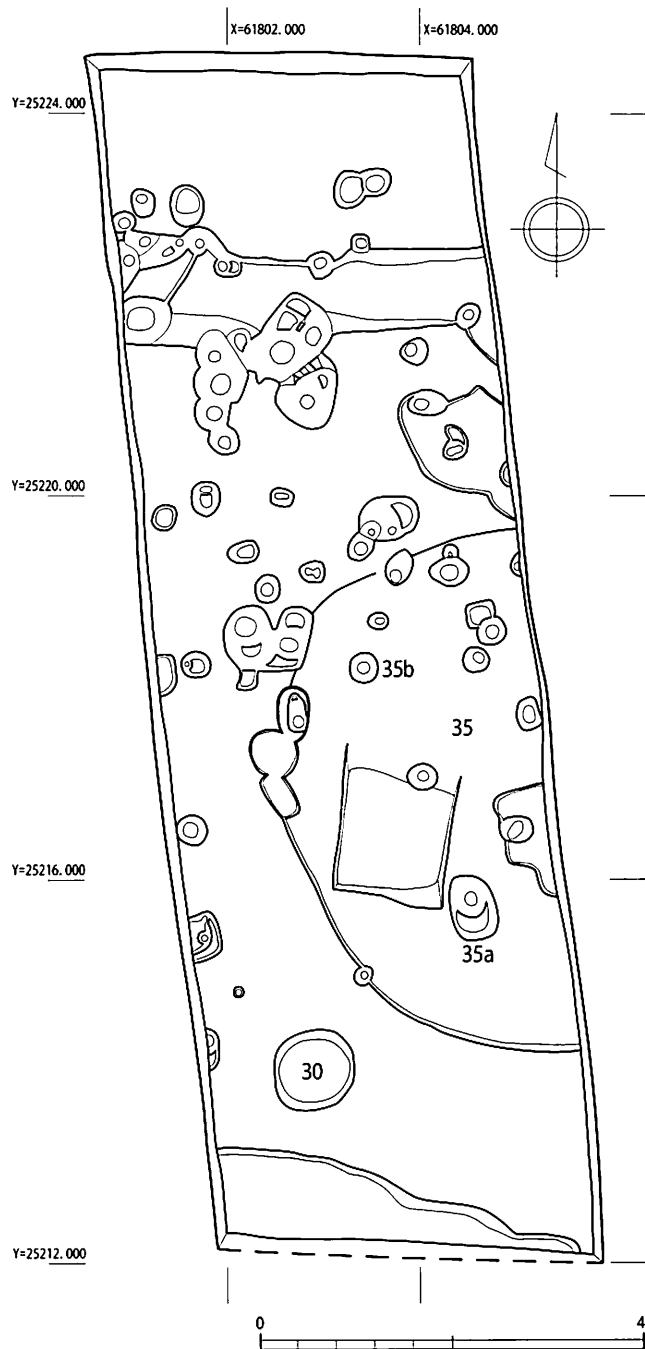
3区は北西に設定した調査区。約4×12mの南北に長い調査区で、表土より約0.6～1.6m下で遺構を検出した。2区と同様に北に向かい緩やかに傾斜し、北端はやや傾斜が強くなる。土層観察から、水田耕作による鉄分の固着が1・2区とほぼ同じ表土下で確認できる。また、1・2区と同様に黒褐色土がほぼ全面で確認でき、北側では堆積が厚くなる。黒褐色土からは、弥生土器や土師器が出土している。調査の結果、弥生時代の竪穴住居、土坑、溝状遺構、多数のピットを検出した。全体に遺構が希薄であるが、北側の溝状遺構付近では、ピットの切り合いが著しいことから、掘立柱建物に関連する可能性が考えられる。

(永松)

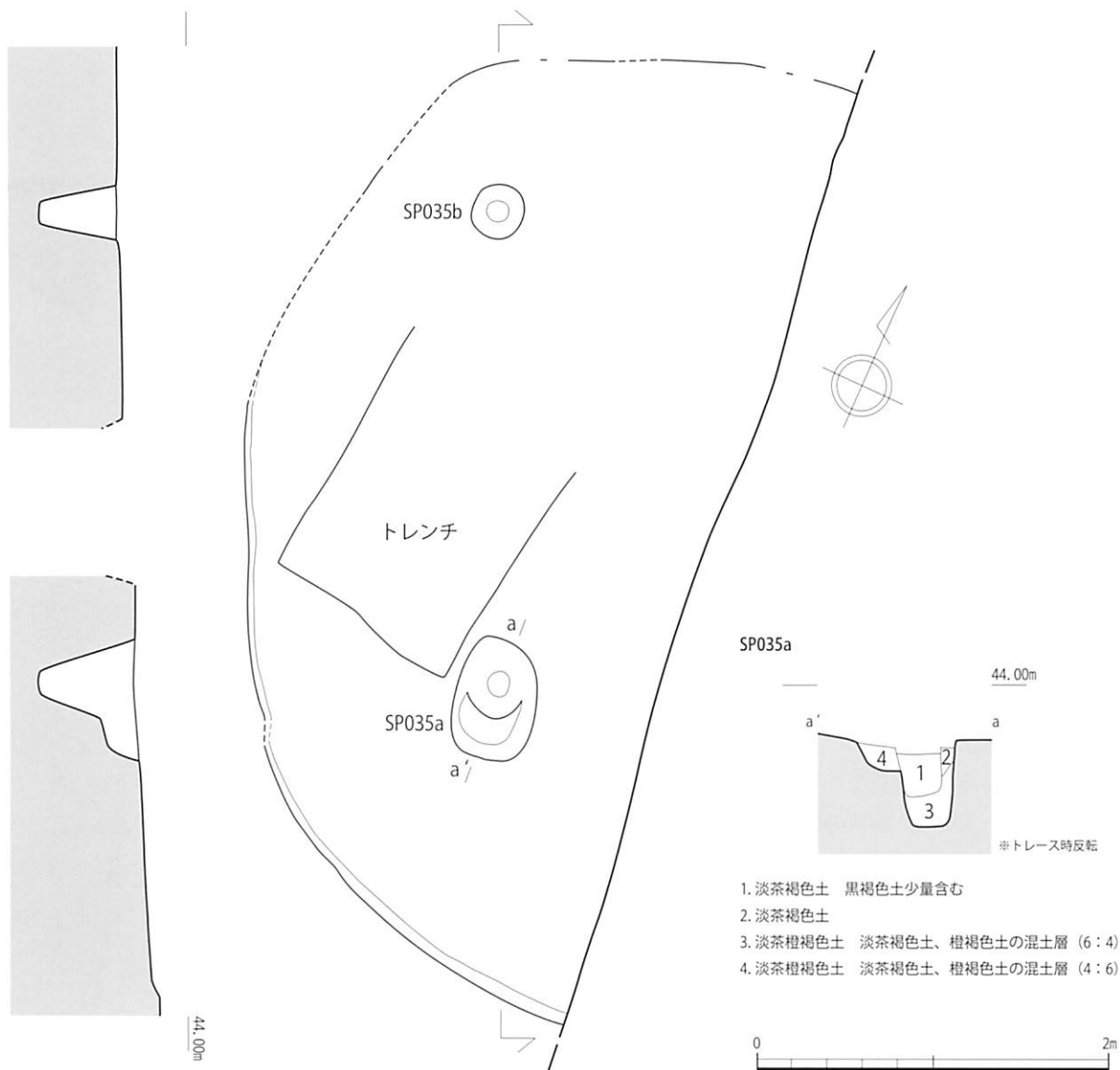
竪穴住居

SH035(第14図)

SH035は3区北東で検出した円形竪穴住居。遺構プランの約1/2を検出し、推定5.0～6.0m規模を測ると考えられる。埋土は一部のみ黒褐色土が堆積しており、非常に浅い。造成による削平と想定され、遺構の北側では遺構プランが判別しづらい。出土遺物は僅少で、弥生土器片が見られる。貼床は検出できなかった。床面に支柱穴を2基検出したが、炉跡や灰溜り土坑は確認できていない。支柱穴は住居壁から約0.8～1.2mほど内側で検出しており、4本柱の支柱穴で構成されていたと推定される。支柱穴のSP035aは径約0.5mで深度は約0.5m、同じくSP035bは径約0.3mで深度約0.5mを測る。SP035aは土層観察から柱痕約0.3mと考えられる。住居プランの外側で



第13図 3区平面図(1/80)



第 14 図 SH035・SP035a 遺構実測図 (1/40)

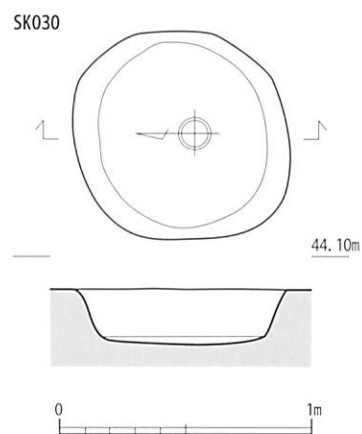
は、僅かに堆積している不定形な遺構を検出した。住居外を巡る壁溝の可能性が考えられる。また、住居中心に焼土が分布する不定形なプランがみられたが、焼土や炭化物が堆積している状況は確認できなかった。時期については出土遺物が僅少なため、構造などから弥生時代の住居跡と判断される。(永松)

土坑

SK030 (第 15 図)

遺構は調査区南西で検出した。切り合い関係はない。平面形は径約 0.9m の円形状を呈し、深さは約 0.2m を測る。埋土は黒褐色土で、淡茶褐色土を含む。埋土中からは弥生土器片が出土した。

(廣瀬)

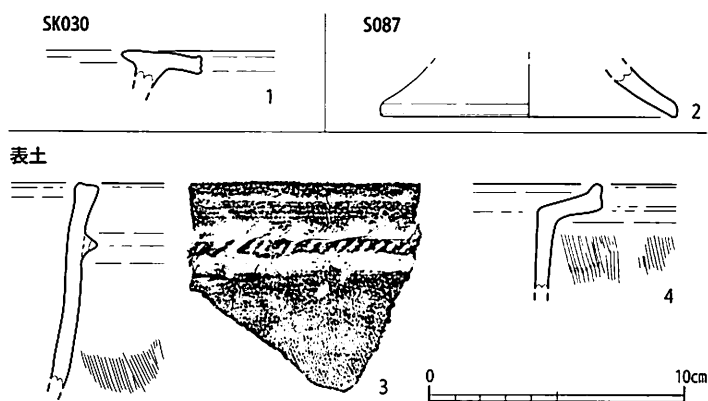


第 15 図 3 区検出土坑実測図 (1/30)

出土遺物（第 16 図）

1 は 3 区 SK030 から出土した高坏口唇部。弥生時代中期末頃で、須久式の影響を受けたものと考えられる。2 は 3 区 S087 から出土した台付鉢の脚部。外面に丹塗りが施される。3・4 は 3 区付近の表土から出土した弥生土器甕で、3 は下城式の特徴である刻目突帯を口縁下部に施す。4 は口縁端部を上方へツマミ出す東部九州系甕の特徴が見られる。

（永松）



第 16 図 3 区出土遺物実測図（1/3）

第 3 章 まとめ

猪野遺跡第 3 次調査は、記録保存を必要とする地点の発掘であるため、遺跡の全容を把握するまでには至っていないが、その成果について記述したい。

1・3 区で確認した弥生時代の円形竪穴住居はほぼ同規模をもつ遺構で、各ピット、土坑などから、弥生時代中期末～後期前葉の壺、甕、高坏、ミニチュア土器破片が出土している。これらから、調査地点が弥生時代の集落範囲内にあり、また西側に谷地形が形成していることから遺跡の西端部分にあたると想定される。また、住居の周囲には多くの土坑があり、住居や集落で利用する廃棄土坑や貯蔵穴と判断される。平成 5 年度の調査においても、多数の土坑が検出されており、貯蔵穴との見解が示されている。これらの土坑は、遺構底部に向かいやや窄まるか垂直に掘削されており、米竹遺跡で確認されている袋状の土坑は確認されない。遺構の時期に大きな隔たりがなく、近接地区での形状差は注目される。住居跡では、炉跡や灰を処理する土坑などが確認できておらず、周辺の米竹や尾崎、北の崎遺跡の住居跡とやや異なる様相があり、屋外炉の存在も考えられ、今後の調査が待たれる。

古代の土師器・須恵器片は僅かに検出されているが、上層埋土等での出土であり 2 次堆積したものと考えられる。

中世の掘立柱建物は、1 棟確認された。周囲には深さ約 0.6～0.7m のピットが複数切り合っており、数度の建替えが考えられ、遺跡西端まで展開していたと思われる。3 区においても同様な傾向が確認でき、広範囲に及ぶ中世集落の展開が想定できる。

以上のことから、猪野遺跡には弥生時代の集落と中世段階の集落とが存在していたことが判明した。平成 8 年度に調査した猪野遺跡東側（猪野・中原遺跡）では、弥生時代の大溝と中世（戦国期）の建物群と地鎮行為を伴う埋納遺構を検出している。調査地から南東約 100m の距離に位置するが、同調査では住居跡や土坑等の居住域を示す資料は確認できていない。前述した猪野遺跡は、調査地から北東約 300m の位置であるが、住居跡が検出できておらず、居住域の中心は猪野遺跡西側にあるものと推定される。今回古代の遺構は、確認できなかったが、調査地から北約 300m の地点では、8 世紀後半の道路状遺構を検出しており、本調査地でも土師器や須恵器が出土するなど、調査地北側にその活動の中心が推定される。

今後、近接する米竹や尾崎、北の崎遺跡など、弥生時代の集落の比較検討を行うことで、各遺跡の集落構造の解明がおこなわれ、鶴崎台地に点在する集落の変遷や関係性についても解明されるものと期待したい。

（永松）

遺構台帳

遺構 番号	調査 区	遺構種類	出土遺物	切り合い関係		
				新	—	旧
S001	2区	柱穴	弥生土器	—	—	—
S002	2区	溝状遺構	埴器(近世)	S002	—	S017
S003	2区	柱穴	弥生土器	—	—	—
S004	2区	柱穴	弥生土器	—	—	—
S005	2区	土坑	土師器(糸切り)	S005	—	S010、S018、S071
S006	2区	柱穴	土器	—	—	—
S007	2区	柱穴	弥生土器	—	—	—
S008	2区	柱穴	弥生土器(赤色)	—	—	—
S009	2区	柱穴	土器	—	—	—
S010	2区	土坑	弥生土器、須恵器	S005 S010	—	S010 S015、S049
S011	2区	土坑?タマリ?	弥生土器	S011	—	S039、S041
S012	2区	柱穴	土器	—	—	—
S013	2区	柱穴	弥生土器	—	—	—
S014	2区	柱穴	弥生土器	—	—	—
S015	2区	タマリ	弥生土器、須恵器	S010、S026 S015	—	S015 S056、S069
S016	2区	柱穴	弥生土器(東九州系・下城式)	—	—	—
S017	2区	タマリ?植痕?	弥生土器、土師器	S002 S017	—	S017 S038
S018	2区	土坑?	弥生土器	S005 S018	—	S018 S054、S071
S019	2区	柱穴	土器片	S019	—	S039
S020	2区	竪立柱建物	—	—	—	—
S020a	2区	柱穴	土師器(糸切り)	—	—	—
S020b	2区	柱穴	—	—	—	—
S020c	2区	柱穴	—	—	—	—
S020d	2区	柱穴	—	—	—	—
S020e	2区	柱穴	—	—	—	—
S021	2区	柱穴	弥生土器	—	—	—
S022	2区	柱穴	土器	—	—	—
S023	2区	柱穴	瓦質土器	—	—	—
S024	2区	柱穴	須恵器	—	—	—
S025	2区	柱穴	土器	—	—	—
S026	2区	溝状遺構	—	S027 S026	—	S026 ビット多数
S027	2区	柱穴	弥生土器(赤色)	S027	—	S026
S028	2区	柱穴	弥生土器	—	—	—
S029	2区	柱穴	土器	S029	—	S067
S030	3区	土坑	弥生土器	—	—	—
S031	2区	柱穴	土器	—	—	—
S032	2区	柱穴	土器	—	—	—
S033	2区	柱穴	土器	—	—	—
S034	2区	柱穴	弥生土器	—	—	—
S035	3区	竪穴住居	弥生土器	ビット多数	—	S035
S035a	3区	竪穴住居主柱穴	—	S035a	—	S035
S036	2区	柱穴	天目茶碗	—	—	—
S037	2区	柱穴	土器	S037	—	S063
S038	2区	柱穴	土器	S017	—	S038
S039	2区	柱穴	弥生土器	S011、S019	—	S039
S040	1区	竪穴住居	埴島産黒曜石(加工)	ビット多数	—	S040
S040a	1区	竪穴住居主柱穴	弥生土器	S040 S040a	—	ビット多数 S040
S040b (S142)	1区	竪穴住居主柱穴	弥生土器	S040b	—	S040
S040c	1区	竪穴住居土坑	弥生土器	S040	—	S040c
S041	2区	柱穴	弥生土器、土師器	S011	—	S041
S042	2区	柱穴	弥生土器	S042	—	S067
S043	2区	柱穴	弥生土器、土師器	S043	—	S059、S062
S044	2区	柱穴	弥生土器(東九州系)	—	—	—
S045	1区	土坑	弥生土器、縄文土器	—	—	—
S046	2区	柱穴	土器	—	—	—
S047	2区	柱穴	弥生土器、ミニチュア土器	—	—	—
S048	2区	柱穴	弥生土器、青磁	—	—	—
S049	2区	柱穴	弥生土器	S010	—	S049
S050	1区	土坑	弥生土器、石核	—	—	—
S051	2区	柱穴	土器、須恵器	S026	—	S051
S052	2区	柱穴	土器	—	—	—
S053	2区	柱穴	弥生土器	—	—	—
S054	2区	柱穴	弥生土器(赤色)	S018	—	S054
S055	1区	土坑	弥生土器(赤色、東九州系・下城式)	—	—	—
S056	2区	柱穴	弥生土器	S015	—	S056
S057	2区	柱穴	弥生土器	S057	—	S066
S058	2区	柱穴	弥生土器	—	—	—
S059	2区	柱穴	土器	S043	—	S059
S060	1区	柱穴	弥生土器	—	—	—
S061	2区	柱穴	土器	—	—	—
S062	2区	柱穴	弥生土器	S043	—	S062
S063	2区	柱穴	須恵器	S037	—	S063
S064	2区	柱穴	須恵器、土器	S026 S064	—	S064 S074
S065	1区	土坑	弥生土器(東九州系)、埴島産黒曜石	—	—	—
S066	2区	柱穴	弥生土器、土器	S057	—	S066

遺構 番号	調査 区	遺構種類	出土遺物	切り合い関係		
				新	—	旧
S067	2区	柱穴	土器	S029、S042	—	S067
S068	欠番	—	—	—	—	—
S069	2区	柱穴	須恵器、土器	S015、S026 S069	—	S069 S073
S070	1区	柱穴	土器	S125	—	S070
S071	2区	土坑	土器	S018、S054	—	S071
S072	2区	柱穴	土器(赤色)	—	—	—
S073	2区	柱穴	須恵器	S026、S069	—	S073
S074	2区	柱穴	弥生土器	S026、S064	—	S074
S075	1区	土坑	弥生土器	S124	—	S075
S076	2区	柱穴	土器	—	—	—
S077	2区	柱穴	黒色土器	S026	—	S077
S078	2区	柱穴	土器	S026	—	S078
S079	2区	柱穴	弥生土器	S026	—	S079
S080	1区	土坑	弥生土器、土師器	—	—	—
S081	2区	柱穴	弥生土器	—	—	—
S082	2区	柱穴	土師器	—	—	—
S083	2区	柱穴	弥生土器	—	—	—
S084	2区	柱穴	須恵器	S026	—	S084
S085	1区	土坑	弥生土器、土師器	—	—	—
S086	3区	柱穴	弥生土器	—	—	—
S087	3区	柱穴	弥生土器(赤色)	S106との切り合い不明		
S088	3区	柱穴	弥生土器	S088	—	S035、S102
S089	3区	柱穴	土器	—	—	—
S090	3区	柱穴	弥生土器	S090	—	S035
S091	3区	柱穴	土器	S091	—	S035
S092	3区	柱穴	土器	S092	—	S035
S093	3区	柱穴	弥生土器	—	—	—
S094	3区	柱穴	弥生土器	S094	—	S035、S095
S095	3区	柱穴	弥生土器(赤色)	S094 S095	—	S095 S035
S096	3区	柱穴	弥生土器(東九州系)	—	—	—
S097	3区	柱穴	土師器	—	—	—
S098	3区	柱穴	土器	S098	—	S099
S099	3区	柱穴	弥生土器(東九州系)	S098	—	S099
S100	3区	柱穴	土器	S100	—	S035、S101
S101	3区	土坑	土器	S100 S101	—	S101 S035
S102	3区	柱穴	弥生土器	S101 S088 S102	—	S102 S035
S103	3区	柱穴	弥生土器	—	—	—
S104	3区	柱穴	弥生土器	S105との切り合い不明		
S105	3区	柱穴	土器	S104との切り合い不明		
S106	3区	柱穴	土師器(糸切り)	S087との切り合い不明		
S107	1区	柱穴	弥生土器	—	—	—
S108	1区	柱穴	弥生土器	—	—	—
S109	1区	柱穴	弥生土器	—	—	—
S110	1区	土坑	弥生土器(赤色)	—	—	—
S111	1区	柱穴	弥生土器	—	—	—
S112	1区	柱穴	土器	—	—	—
S113	1区	柱穴	弥生土器(赤色)	—	—	—
S114	1区	柱穴	土器	—	—	—
S115	1区	柱穴	弥生土器	—	—	—
S116	1区	柱穴	弥生土器	—	—	—
S117	1区	柱穴	弥生土器	—	—	—
S118	1区	柱穴	—	—	—	—
S119	1区	柱穴	土器	S119	—	S129、S130
S120	1区	柱穴	弥生土器(赤色)、ミニチュア土器(下城式)	—	—	—
S121	1区	柱穴	弥生土器	—	—	—
S122	1区	柱穴	弥生土器	—	—	—
S123	1区	柱穴	弥生土器、鉄滓	—	—	—
S124	1区	タマリ	弥生土器(東九州系)	S124	—	S075
S125	1区	柱穴	土器	S125	—	S070
S126	1区	柱穴	弥生土器	—	—	—
S127	1区	柱穴	弥生土器	—	—	—
S128	1区	柱穴	弥生土器(下城式)	—	—	—
S129	1区	柱穴	土器	S119 S129	—	S129 S130
S130	1区	柱穴	弥生土器(赤色)	S119、S129	—	S130
S131	1区	柱穴	弥生土器、ミニチュア土器	S131	—	S140
S132	1区	柱穴	弥生土器、ミニチュア土器、須恵器	S132	—	S040、S143
S133	1区	柱穴	土器	S139 S133	—	S133 S040、S143
S134	1区	柱穴	弥生土器	S134	—	S040
S135	1区	竪穴住居	弥生土器(東九州系)	—	—	—
S136	1区	柱穴	弥生土器	—	—	—
S137	1区	柱穴	弥生土器(赤色)	—	—	—
S138	1区	柱穴	弥生土器	S040	—	S138
S139	1区	柱穴	弥生土器	S139	—	S040、S133、S143
S140	1区	土坑	弥生土器(下城式)	S131	—	S140
S141	1区	柱穴	弥生土器(赤色)	S141	—	S040
S143	1区	柱穴	弥生土器、土師器	S132、S133、S139 S143	—	S143 S040

遺物観察表

図版 番号	実測 番号	調査区	遺構 番号	種類	器種	口径 (最大長)	器高 (最大幅)	底径 (最大厚)	孔径	重量	胎土	色調		調整		備考
												外面	内面	外面	内面	
第8図-1	R06	1区	SH040	弥生土器	甕			1.9+			白色粒、長石、赤色粒	明橙褐色	橙褐色	ナデ	ナデ	
第8図-2	R07	1区	SH040b	弥生土器	ミニチュア土器鉢	4.5		0.8+			長石、白色粒、赤色粒	淡橙褐色	橙褐色	ナデ後ミガキ	ナデ	
第8図-3	R08	1区	SK045	弥生土器	甕		9.7+				長石、白色粒、赤色粒	淡橙褐色	淡橙褐色	ヨコナデ、ナデ後ミガキ	ナデ、ヨコナデ	1層
第8図-4	R11	1区	SK050	弥生土器	甕		3.9+				白色粒、角閃石、赤色粒	淡橙褐色	淡橙褐色	ヨコナデ	ナデ	
第8図-5	R12	1区	SK050	弥生土器	甕		2.0+				石英、長石	暗褐色	橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
第8図-6	R13	1区	SK050	黒曜石	大型石鏃か	7.9	5.1	1.8								2層 姫島産
第8図-7	R14	1区	SK055	弥生土器	甕		3.5+				白色粒、角閃石	暗褐色	橙褐色	ナデ、ヨコナデ、突帯貼付け	ヨコハケ、ヨコナデ	下城式
第8図-8	R15	1区	SK055	弥生土器	甕		5.0+				黒色粒、赤色粒、白色粒	淡灰褐色	淡褐色	工具ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ	
第8図-9	R17	1区	SK065	弥生土器	甕		2.0+				長石、角閃石、石英	茶褐色	橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
第8図-10	R16	1区	SK065	流紋岩	石核	7.3	10.3	3.9								
第8図-11	R18	1区	SK080	弥生土器	壺		4.7+				黒色粒、石英、長石、赤色粒、白色粒	橙褐色	淡橙褐色	ハケ後ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	
第8図-12	R19	1区	SK085	弥生土器	高坏		1.3+				黒色粒、角閃石、砂粒	赤褐色	褐色	ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ	両面丹塗り
第8図-13	R21	1区	SK110	弥生土器	甕		2.8+	(5.7)			白色粒、赤色粒	暗褐色	暗褐色	ヨコナデ	ナデ	1層
第8図-14	R22	1区	S120	弥生土器	ミニチュア土器甕		3.0+				角閃石、石英	赤褐色	赤褐色	ヨコナデ	ナデ	両面丹塗り
第8図-15	R23	1区	S123	鉄滓	碗形滓	5.0	6.4	2.3		77.7						
第8図-16	R24	1区	SK140	弥生土器	甕		4.1+				長石、黒色粒	暗褐色～黒褐色	暗褐色	ヨコナデ、突帯貼付け	ナデ	下城式
第8図-17	R25	1区	SK140	弥生土器	壺	15.0+	7.3+				角閃石、白色粒	橙褐色～褐色	暗褐色	強いヨコナデ、突帯貼付け	ナデ、指オサエ	
第8図-18	R26	1区	包含層	弥生土器	高坏		1.8+				角閃石、白色粒	灰褐色～褐色	黒褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	黒褐色土
第8図-19	R30	1区	排土	銭貨	銅銭	2.4			一辺0.7	1.3						北宋銭「天聖通寶」か(真番・初鑄造1023年)
第12図-1	R01	2区	S001	土師質土器	釜		3.2+				角閃石、石英、赤色粒	淡褐色	淡黄褐色	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ハケ、ナデ	
第12図-2	R02	2区	SK005	土師器	坏	(13.1)	3.3	(8.4)			角閃石、長石、石英、赤色粒	明橙褐色	明褐色	ナデ、糸切離し後板状圧痕	ヨコナデ	
第12図-3	R03	2区	SB020d	土師器	坏	4.5+	1.2+				角閃石、長石、赤色粒	淡褐色	淡褐色	糸切離し後ナデ	ヨコナデ	
第12図-4	R05	2区	S039	弥生土器	甕	2.7+	2.9+				長石	暗赤褐色	淡褐色	ナデ後ミガキ	ヨコナデ	外面丹塗り
第12図-5	R09	2区	S048	骨磁	碗	(8.0)	3.4+					淡オリーブ灰色	淡オリーブ灰色	施釉	施釉	
第12図-6	R10	2区	S049	弥生土器	壺	11.1+	4.6+	(3.8)			白色粒、長石	暗茶褐色	淡灰褐色	ハケ後ナデ、ミガキ	ナデ、工具痕	
第12図-7	R27	2区	表土	弥生土器	甕		5.4+				黒色粒、赤色粒、白色粒	淡橙褐色	橙褐色	ヨコナデ、タテハケ、突帯貼付け	ヨコナデ、ナメハケ、ナデ	下城式
第16図-1	R04	3区	SK030	弥生土器	高坏		1.4+				長石、石英	黒褐色	黒褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
第16図-2	R20	3区	S087	弥生土器	台付鉢		1.9+	(11.6)			黒色粒、長石、砂粒	赤褐色	褐色	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ	外面丹塗り
第16図-3	R28	3区	表土	弥生土器	甕		8.2+				角閃石、黒色粒、赤色粒	褐色～黒褐色	橙褐色	ヨコナデ、タテハケ、突帯貼付け	ヨコナデ	下城式
第16図-4	R29	3区	表土	弥生土器	甕		4.0+				石英、白色粒、赤色粒	暗褐色～橙褐色	淡橙褐色	ヨコナデ、タテハケ	ナデ、ヨコナデ	

※ 口径・器高・底径・孔径の単位はcm、重量の単位はg

遺構写真図版 ①



1区 SH040 焼土集中部検出状況（北より）



1区 SH040 焼土集中部土層断面（北西より）



1区 SH040 完掘状況（北より）



1区 SK050 土層断面（北西より）



1区 SK140 遺物出土状況（東より）



1区 完掘状況全景（西より）



1区 西壁南西隅土層断面（東より）



2区 SB020 検出状況（西より）

遺構写真図版②



2区 SB020 完掘状況（西より）



2区 完掘状況全景（南より）



3区 SP035a 土層断面（西より）



3区 SH035 埋土除去後（西より）



3区 完掘状況全景南側（西より）



3区 完掘状況全景北側（西より）



調査風景（遺構検出）



調査風景（遺構掘削）

遺物写真図版



第 8 図- 2



第 8 図- 3



第 8 図- 6



第 8 図- 6



第 8 図- 7



第 8 図- 10



第 8 図- 10



第 8 図- 14



第 8 図- 15



第 8 図- 16



第 8 図- 17



第 12 図- 1



第 12 図- 5



第 12 図- 7



第 16 図- 3

報 告 書 抄 録

ふ り が な	いのいせき だい3じちようさほうこくしょ								
書 名	猪野遺跡 第3次調査報告書								
副 書 名	集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査								
巻 次									
シ リ ー ズ 名	大分市埋蔵文化財発掘調査報告書								
シ リ ー ズ 番 号	第97集								
編 著 者 名	永松 正大 廣瀬 育子								
編 集 機 関	大分市教育委員会								
所 在 地	〒870-0046 大分市荷揚町2番31号 TEL (097) 534-6111								
発 行 年 月 日	西暦2010年3月31日								
ふ り が な 所 収 遺 跡 名	所 在 地		コ ー ド		北 緯	東 経	調 査 期 間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
いのいせき 猪 野 遺 跡	大分市大字猪野字猪野原 1269-1・1274-9・1274-10		201	153	33° 33´ 26″	131° 16´ 17″	2009. 07. 23 ～2009. 08. 21	292. 8㎡	集合住宅建設
所 収 遺 跡 名	種 別	主な時代	主 な 遺 構			主 な 遺 物		特記事項	
猪野遺跡第3次調査	集落	中世・弥生	掘立柱建物跡・竪穴住居跡・土坑・ピットなど			弥生土器・石器など			
要 約	本書は平成21年度に行った猪野遺跡第3次調査成果を所収する。調査では、弥生時代と中世の遺構を検出した。弥生時代では、円形住居跡2軒と土坑、中世では掘立柱建物跡1棟を確認した。出土遺物では、弥生時代中期末～後期前葉に比定される多量の高坏、甕片の他、ミニチュア土器や姫島産黒曜石、流紋岩製石核なども出土した。								

猪 野 遺 跡

第3次調査報告書

集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

平成22年3月31日

発行 大分市教育委員会
大分市荷揚町2番31号